

住宅における新技術の導入についてのヒアリングの概要 (令和2年度第3回企画部会)

【積水ハウス株式会社 石井氏】

- 積水ハウスでは、これまで耐震性能、耐火性能など安全・安心に係る技術開発、ユニバーサルデザイン、室内空気質、断熱性などの快適性に係る技術開発を進め、住宅を提供してきた。
- これからは、こうした技術に加え、人生100年時代に「わが家」を世界一しあわせな場所にする」ビジョンのもと、IoTにより住まいや、住まい手のデータを取得しサービスを提供するプラットフォームハウス構想を進めていきたい。
- 人生100年時代の無形資産である「健康」「つながり」「学び」といったところに貢献していくことを目指しており、例えば、在宅時急性疾患早期対応ネットワークのパイロットプロジェクトについて、実住宅での生活者参加型社会実装を2020年中に開始する。
- 住宅に非接触型センサーを組み込むことによって「今までどおりの生活」をしながらデータを取得できるようになり、「家が健康をつくりだす」ことにつなげることができる。

【関連した委員からのコメント】

- 大手の住宅事業者は、コロナ以前の住まいづくりについて、省エネ、安全、健康を基本コンセプトにしていた。
- 省エネに関しては、ゼロエネルギー住宅(ZEH)はすでに普及しており、家庭用蓄電池の導入や、車と家をつなぐV2H、HEMSによるエネルギー管理などの技術開発・実装が進んでいる。
- 安全面では、高水準の耐震性能に加えて、台風などの際の耐風性能や、水害危険から住宅を守る耐水性能などの技術開発・実装が進められている。危険からどう住宅を守るか、あるいは災害時にも自立して生活を維持し、避難所などの密な空間を回避する観点も含め、レジリエンスがキーワードになってきている。
- 健康については、断熱性が高いと住戸内の温度変化が穏やかになり居住者の健康にも良いことから、住戸内の良好な温熱環境づくりが大きなコンセプトとして定着しつつある。また、急速な高齢化を背景に、ITや先進技術を使った健康管理、在宅診療は複数社で取組が始まっている。
- 今回のコロナを経て、新しい住宅ニーズが出てきている。働き方が変わり、在宅時間が長くなる中で、テレワーク空間の整備、内装の木質化など居心地を良くすることや、玄関近くへの洗面設備の設置など、住宅の機能や設備のレイアウトに変化が発生している。また、AIで住生活サービスの質を高めたり、ITで新しいコミュニティの形を作ったり、居住者同士をつなぐコミュニティの運営や、住宅と医療機関をつなぐなど、住宅産業はソフトの住生活サービスを行う総合的な産業へと変貌しつつある。